

都市公園と里山林の植物相の保全と活用

里山林と都市公園

里山

里山とは昔から薪や柴をとったり、炭を焼いたり、落葉をかいて肥料にしたり、山菜をとったりと言うように様々な形で繰り返し人間が利用してきた自然であり、四手井綱英が昭和30年代に作った造語とされ、農用林を里山林と呼んでいました。

里山林

里山林とは人里近くに成立する林で、スギ・ヒノキ植林、竹林、雑木林などをひっくるめてさしています。雑木林（関東の武蔵野台地に広がる夏緑二次林が有名）も里山林と同じような意味で使われます。

里山林とそれに隣接する中間山地の水田や溜池、用水路、茅場なども含めた景観を里山と呼んでいます。



都市公園

都市公園は都市公園法によって定められているが、公園の面積と利用者の居住地からの距離で主に住区基幹公園、都市基幹公園、大規模公園などに分けられています。また利用目的によって総合公園、運動公園などに類別されます。このような面積や利用形態の違いによって、生育する植物も大きく変わります。

都市公園と里山林の植物相の比較

それぞれの公園や緑地で出現した植物を花壇に植えられた園芸植物などを除き、草本から木本まで、出現した植物をすべて記録していきます。1か所で季節を変えて3回ほど調査し、都市公園と里山林の植物相の比較を行いました。

現在大阪周辺の都市公園 35 地点、大阪・兵庫の里山林 10 地点の調査が終わり、集計を行っています。全出現種数は 1617 種、共通種は 628 種、都市公園のみに見られた種は 242 種、里山林のみに出現した種は 847 種となりました。

都市公園と里山林に共通する種はカタバミ、ヨモギ、スズメノカタビラ、メヒシバなど、史前帰化植物と呼ばれる一年生の路傍雑草が多く見られました。

都市公園のみに出現した植物は一年生の外

来草本ばかりで、アメリカオニアザミ、セイヨウカラシナ、カラスムギなどでした。里山林では都市公園では見られない在来の多年生植物が多く出現し、ヤマイタチシダ、イノデモドキ、オオハナワラビなどのシダ植物が見られることが都市公園と大きく違っていました。

都市公園に残された貴重種

今回の調査で、都市公園に少なからずの貴重種が生育することが明らかになりました。路傍雑草のイヌノフグリ、水田雑草のムツオレグサ、水草のアサザ、ドクゼリ、海岸性のハマヒエガエリなどが大阪市内の大規模都市公園で見つかりました。

大規模公園では、様々な環境（水路、池、草地）が残されており、また草刈りなどの管理作業も十分に生き届かないと

ころが残されており、そのようなわずかな生育環境で貴重種が細々と生き残ってきたことが明らかとなりました。

今後はどのような環境を残せば貴重種を効果的に保全できるのか、都市公園と里山林の植物を利用した自然観察ガイドの作成などについての研究を進めていきたいと考えています。



イヌノフグリ



都市公園と里山林の植物相の保全と活用

代表者：藤井俊夫

分担者：大阪市立自然史博物館

協力者：ささやまの森公園、江古花園、青垣町森自然環境保全友の会、
韮公園自然研究会